

伊藤が金子に渡米を依頼したのは、二月四日、対露開戦を決定した御前会議の日の晩であつた。米世論を動かすことの難しく、成功の見込なきを理由に渡米を辞退する金子に、伊藤は、「今度の戦争で成功すると思ふ者は一人も居らず、事ここに至れば国を賭しても戦ふの一途あるのみ。かく云ふ伊藤も、我が陸軍が満洲から追払はれ、海軍が対馬海峡で悉く沈められ、露軍が我国に迫つた時は、身を士卒に伍して鉄砲を担いで、山陰道か九州海岸で命の限り露軍を防ぎ、一步たりとも敵に日本の土地を踏ませぬ決心である。君も成功・不成功を問はず、あらん限りの力を尽くして米国人が同情を寄せるやうにやつてくれ」と説いた。されば金子も「三寸の舌のあらん限り」米国民を説得すべく、訪米を諾したのであつた（金子堅太郎「日露戦役秘録」）。

米国に着いてからの金子は、ルーズヴェルト大統領はじめ各界の士と交流し、また機会ある毎に演説を行なつた。彼の説くところ、対露戦争が日本にとつては正義の自衛戦争なること、日本は露国が宣伝するが如き野蛮国にあらずして、維新以来、着々と文明開化の実を挙げて居ること、此度の戦争に於ても、日本は露国とは違つて国際法と人道を忠実に遵守していることなどに留まらず、日本の歴史や国民精神にまで及んだのであり、その卓越した英語による名演説が正義感の強い米国民に与へた影響は甚大であつたと云へよう。金子の活動については次節で触れる。

他方、英国では末松が、「日本側が今回の戦争を近世文明の精神を以て実行すべしとのことを、公衆に向かつて反覆説示」するに努めてゐた（松村正義「日露戦争と金子堅太郎」）。

宣伝の不得手な日本人が、日露戦争に際しては、いち早く欧米に於ける広報活動に着眼し、かつ成功したことは注目すべき事実と云へるだらう。その後の日本の外交戦略に於て、広報・宣伝と云ふ視点が稍もすれば軽視されがちであつたことは、我が国民性の然らしむる所とは云ひながら、顧みて惜しまれることである。

第六節 日露戦争の世界史的意義

アジアは日本の勝利に興奮した

日露戦争の重大意義は、アジア及び世界の抑圧された民族に希望と自信を与へ、その民族独立運動を促したことだ。なにに我國の歴史教科書は、日露戦争のこのやうな世界史的意義について一行の紙幅も割かうとしない。

地理上の発見以後、アジアは年を追ひ、世紀を追うて西力東漸の波に洗はれ、白人国家の圧迫と支配を受けるに至つた。十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、アジア太平洋地域の諸国は西洋列強の植民地となるか、領土の一部を侵奪されるか、いづれかの運命の下におかれてゐた。その唯一の例外は我が日本だつた。日本だけが、当時アジアで唯一の完全な独立国家であり、立憲政体と議會制度と近代の軍隊を持つてゐた。アジアで、憲法と議會を有する国は他に存在しなかつたのだ。

日露戦争は有色人種の白色人種に対する勝利であり、また立憲国家の専制国家に対する勝利の戦ひでもあつた。日本の輝かしき勝利が、西洋列強の桎梏下に呻吟するアジア後進諸国に与へた衝撃は甚大で、日露戦争は全アジアを覚醒、奮起せしめ、ここに民族独立運動は澎湃として起り、広がつて行く。

「アジアは日本の勝利を跳び上がつて喜んだ」と『日露戦争全史』の著者ウォーナー夫妻は書いてゐる。独立の気運はフィリピン、ベトナム、ビルマ、インドネシアなど東南アジア全域に及んだ。

インドもさうだ。「日本の情熱が私の情熱をかき立てた……民族主義的な思想が私の心を満たした。私はヨーロ

ツパの束縛からインドとアジアの自由を取り戻すための瞑想にふけた」とネールは述懐している。

「大きな興奮がインド全土を駆けめぐった。片田舎の村でさえ、インド人達は車座になつて、また夜は水煙草の壺の囲りに集まつて日本の勝利について語り合つてゐる」——これはインドを旅行したある英人の見聞だ。

だが最も衝撃の大きかつたのは中国である。日清戦争以後、中国人の日本留学生は漸増したが、日露戦争中からその数は激増し、戦争の終つた翌明治三十九年、東京在留の中国人留学生の数は一万五千にも達した。

日清戦争での清の敗北は中国知識階級に「日本は何故に強いのか」との疑問を投げかけたが、今や中国人留学生は直接日本社会に触れ、日本が維新によつて外圧を克服し、立憲君主制度と富国強兵を通じて近代国家に躍進した歴史の道筋を理解した。彼等が日本を学ぶことによつて祖国中国を衰亡の淵から救はんと願つたのは自然だ。明治三十八年から留日学生の間に革命気運が擡頭した。

ロンドンに在つた孫文が東京の同志からの要請で再び日本に戻つたのは明治三十八年七月、日本の決定的勝利によつて東洋が感激と興奮に包まれてゐる時だつた。当時、日本に於ける中国革命運動には、孫文の興中会をはじめとして三派があつたが、孫文を迎へて三派は大団結し、明治三十八年八月、東京に於て「中国革命同盟会」が成立した。日露戦争は、斯くして中国の革命運動を大きく前進させたのであつた。

諸民族に独立への勇氣与へる

日露戦争に勝つた日本は、正に昇る太陽の如く、白人帝国主義下に呻吟するアジアと世界の諸民族に希望と勇氣を与へた。日本に憧れる留学生の急増したことは前述したが、その中の一人で、後年我国と干戈を交へることになる蔣介石は、當時を次のやうに回想してゐる。

「当時（日露戦争翌年）、郷里に土豪劣紳が横行してゐるのを痛憤し、わが国が帝国主義者の圧迫をうけてゐるのを

目撃した。とくに日本が一弱小国でありながら発奮して強大となり、ロシア帝国を打ち破ることができたことは、私の精神にもつとも大きな刺激を与へた。そこで……母の許しを乞ひ、日本へ行つて軍事を学ぶことにした。国民の一人としての義務を尽くし、国家の外恥をそいで、自強を促進しようと考へたのである」「日本へ渡る船の上で、同行の中国大学生が甲板にタンを吐いた。それを見てゐた中国人の船員が教へてくれた。「日本人は普通やたらな所にタンを吐かない。手拭かハンカチを使ひ、折りたたんでポケットへ入れて持ち帰り、洗ふなり捨てるなりする」私には非常に印象深く、今も忘れられない出来事であつた」（蔣介石秘録）

この時に蔣が受けた「清潔なる日本」の印象は深く彼の記憶に刻まれ、三十年後、「新生活運動」の構想を生み出すことになる。日本についての彼のいはば原体験がここに語られてゐると云つてよい。

中国の作家魯迅の弟の周作人も日露戦争のあと日本に留学した中国人の一人であるが、後年、日露戦争での日本の勝利から受けた感激をかう述べてゐる。

「私が初めて東京へ行つたのは明治三十九年、丁度日露戦争の終つた翌年のことである。今では中国の若い人ももう殆ど知らぬだらうし、日本人でもおそらく身にしみては知るまいと思ふのだが、その頃の日本は私どもに二つの大きな影響を与へたのだつた。一つは明治維新、一つは日露戦争である。当時中国の知識階級は祖国の危機を痛切に感じ、いかにすれば国を救ひ西洋各国の侵略を免れうるか、といふことに最も腐心してゐた。そこで日本が維新を成功させ、変法自強の道を発見したのを見て大いに奮起し、ロシアに勝利したのを見て更に少からず勇氣づけられ、西洋に抵抗して東亜の保全を計るのは不可能でないことを思ひ知つた。中国で留学生を日本に遣はした狙ひもここにあつたわけで……このごろ流行りの言葉でいへば、みな熱烈な興亜の意気に燃えてゐたのである。中国人がいかに日本の明治維新に感服賛嘆し、日露戦争に関していかに日本の勝利を願つたことか、今思出してても実際奇異なくらいである。率直に言つて、それは去年の大東亜戦勃発の時に幾分かまさるほど真実で熱烈であつた」（「留学中の思い出」）

また、日本とは不倶戴天の敵であつた中共の毛沢東ですら

「私は彼（日本留学から帰国した教師）が日本について話すのを聴くのが好きでした。彼は音楽と英語を教へてゐました。その歌の一つに日本の『黄海の海戦』といふのがあり、その歌詞の美しい言葉をいまだに一部分覚えてゐます。……当時私は日本の美を知り、また感じとり、このロシアへの勝利の歌に日本の誇りと力といったものを感じたのでした」（エドガー・スノー「中国の赤い星」）

と語つてゐるのを見れば、我が勝利が支那の人々に与へた感銘の深さが知られよう。

支那ばかりではない。インドの王族階級出身でありながら、愛国者であつたビハリ・ボースが、インドの独立運動を志すようになったのも日露戦争に刺激されてのことであつた。彼は日露戦争の翌年に国民会議派の急進派に参加し、武力革命を主張した。彼が後年、日本に亡命し、頭山満らの計らひで新宿中村屋の相馬愛蔵にかくまはれることになる話は有名である（相馬愛蔵「二商人として」）。

日本の勝利が独立運動家に勇氣と希望を与へ、民族主義の氣運を盛り上げ、運動を推進したのは、この他、フィリピン、ベトナム、ビルマ、インドネシアに於ても同じであつた。

またアジアのみならず、長年ロシアの暴圧に苦しんできたフィンランド、ポーランド、スウェーデンなどの歐洲の国々も、ロシアの敗北を切望し、日本の捷報に歓喜したのであり、かく見れば、日本の勝利は世界史的な意義を有するに至つたと云つても過言ではないだらう。

第七節 韓国併合への道

欺瞞的な韓国の「中立声明」

日露戦争終結後、世界と極東の政局の潮流を一変させる諸々の事件や事態が、僅か十数年の間に生起した。韓国併合、辛亥革命、そして所謂「二十一カ条」問題、滿洲の鉄道争覇戦、米国の排日移民問題、ロシア革命、シベリア出兵等、第一次歐洲大戰の波紋である。この中で、極東政情に安定をもたらしたのは韓国併合のみ、他は悉く後日の事変及び戦争の遠因となつた。

日露戦争が各国の民族独立運動を勇氣づけ、促進したのとは裏腹に、ひとり韓国が日本に併合される道を辿つたことは一見矛盾した現象のやうではあるが、これは日露戦争が韓国をめぐつて戦はれたことと深く結びついてゐる。そこで、日韓両国民の感情に深い亀裂を残すことになつた韓国併合への過程を略述しよう。

明治三十七年（一九〇四年）一月、日露關係が急迫するや、韓廷は突如、「厳正中立」を密かに列国に打電したが、すでに京城を制圧してゐたロシアはこれを無視した。露兵を撤退させ得ない「中立声明」は一片の空文に過ぎなかつた。

そもそも宣戦布告も交戦行動もないのに、この奇妙な声明が出たのは、ロシア側の戦術によるものであつた。戦争となれば、日本が朝鮮を進路に選ぶことは明白だつたので、日本軍の朝鮮領土利用を予め封じておかうとして、ロシア側から知恵をつけられ、朝鮮政府はこのやうな早まつた中立声明を發したのだと云はれてゐる。その上、こ